

# 「お雇い外国人」の教材化のための研究

－歴史教科書分析と授業実践記録を手がかりに－

森口洋一

(奈良教育大学 社会科教育講座)

A study for employed foreigners in the meiji period:  
clue of analysis of history textbook and class record

Hirokazu MORIGUCHI

(Department of Social Studies, Nara University of Education)

**要旨：**日本の近代化を語る際に欠かすことができないのが、主に明治時代前期に来日し、幅広い分野で活躍した「お雇い外国人」と呼ばれた人々の存在である。まず中学校歴史的分野教科書が、彼らをどのように記述しているのかを分析する。次に“日本の紙幣肖像の父”と呼ばれたイタリア人キヨッソーネを取り上げた授業実践記録を提示し、そこで得られた感想文等も検討することで、「お雇い外国人」をどのように教材化していくのかを研究報告する。

**キーワード：**お雇い外国人 employed foreigners in the meiji period

日本の近代化 modernization of Japan

歴史教科書 history textbook

キヨッソーネ Chiossone

## 1. はじめに

本研究は、中学校社会科歴史的分野教科書における「お雇い外国人」<sup>1</sup>に関する記述を比較検討し、併せて「授業実践記録」を提示することで、日本の近代化に大きく貢献したお雇い外国人の役割を多角的・多面的に分析し、中学校社会科歴史的分野の近代史における授業に反映させることを目的とする。とはいえ歴史的分野の学習はただでさえ時間不足になりがちである。「お雇い外国人」の学習に、数時間割くことは現実には不可能であろう。そこで実際に可能な方法を探っていきたい。

具体的には、「お雇い外国人」学習に2時間を確保し、1時間目は概要を学ばせる「お雇い外国人入門」、2時間目に大蔵省紙幣寮（後に紙幣局さらに印刷局に改称）において、紙幣図案制作に携わったキヨッソーネに焦点を当てた授業「“紙幣肖像の父”キヨッソーネ」を行う。

## 2. 中学生の「お雇い外国人」認識

まず授業実践に先立ち、中学校2年生<sup>2</sup>にアンケートを実施した。「お雇い外国人」という言葉を聞いたことがありますか?という問いに対して、「ある」は8.8%(11名)、「ない」は91.2%(114名)であった(有効回答総数125名)。しかし「ある」と答えた生徒に対して、その意

味を問うたところ、正確な意味を捉えた「富国強兵をつくるうえで、雇われた外国人」という解答は一人だけで、「安い賃金で工場に雇われたベトナム、東南アジアの人々」といった、現代の外国人労働者と混同したのが見受けられた。さらに知っている具体的な人物名を問うと、モース2名、フェノロサ、クラーク、コンドル各1名で、認知度は低かった。小学校社会科学習指導要領において、「学習できるように指導すべき」として挙げられている人物には、ザビエル、ペリーといった外国人も含まれているが、お雇い外国人はいない。生徒のお雇い外国人認識にも、そのことが反映していると考えられる。

## 3. 教科書研究

### 3.1. 教科書における「お雇い外国人」記述

平成27(2015)年3月31日検定済の中学校歴史的分野教科書の「お雇い外国人」に関する記述を検討する。

#### A. 『社会科中学生の歴史』帝国書院

【本文】新政府は、まず「富国」のため、お雇い外国人とよばれた外国人技術者や学者を招きました。【特集】歴史を探そう 移住と開拓が進む北海道の中でクラーク博士の紹介 【図版】鹿鳴館に集まる人々 設計者コンドルを紹介【本文】日本の伝統的な美術は、アメリカ人のフェノロサらによって見直され、狩野芳崖らによって新しい日本画が誕生しました。【図版】「世界と日本を結ぶさきがけとなった人々」

モース、フェノロサ、ラファディオ＝ハーン、クラーク、ナウマンについて業績を添えて紹介。(最終頁 見開き)
B. 「新しい社会 歴史」東京書籍
【本文】政府は、東京大学をはじめとする各種の高等教育機関を創り、お雇い外国人を教師にするとともに、多くの留学生を欧米に派遣して、欧米の新しい科学や技術を取り入れることに努めました。【注】(お雇い外国人の説明)「政府などが呼んで雇い入れた外国人で、学問だけでなく技術や軍事も教えました。【本文】群馬県の富岡製糸工場 フランス人技師の指導の下、操業を開始しました。【本文】美術では、アメリカ人のフェノロサが岡倉天心と協力して日本の美術の復興に努めたため、明治維新の時期にいったん否定された日本の伝統の価値が、徐々に見直されるようになりました。
C. 『中学社会歴史的分野』日本文教出版
【本文】政府は、積極的に外国人技術者を招いて、欧米の進んだ技術や機械をとり入れた官営模範工場をつくらせたり、博覧会を開いたりして新技術の開発と普及にあたりました。これを殖産興業といいます。【図版】富岡製糸工場 開国後、ヨーロッパに生糸を輸出していましたが、質の悪さが問題となりました。そこでフランスから技師を招いて機械を導入し、1872年、官営模範工場として群馬県に富岡製糸工場がつけられました。【コラム】近代社会に日本を見つめ直すー岡倉天心とフェノロサ【コラム】近代化遺産を訪ねよう富岡製糸場を調べる(フランス人による立地条件調査)
D. 『中学社会歴史 未来を開く』教育出版
【本文】政府は、産業についても近代化を図るため、関所や株仲間を廃止し、自由な経済活動を促しました。そして、欧米の先進国から招いたお雇い外国人らの指導のもとで、西洋の知識や技術を取り入れ、近代産業の育成を目指しました。この政策を、殖産興業といいます。【欄外】お雇い外国人は、政府・工場・学校などで指導にあたりました。札幌農学校に勤務したクラークをはじめ、大森貝塚を発見したモースや、鹿鳴館を設計したコンドル、東京美術学校(現在の東京芸術大学)の設立に尽くしたフェノロサなどがいました。【図版】富岡製糸場 政府は最大の輸出品だった生糸を増産するために、フランスから最新の機械を導入し、工女を募集して、群馬県の富岡に工場を開設しました。【図版】建設当時の埠頭や建物が残る三角西港(熊本県宇城市) ムルドルによって設計された港です。【図版】クラークの像(北海道札幌市) 自然科学などを英語で教えたほか、キリスト教も講じました。【本文】岡倉天心やフェノロサにより、伝統的な日本の美術の価値も見直され、横山大観の日本画や高村光雲の彫刻などは、海外でも高い評価を受けました。
E. 『中学歴史 日本の歴史と世界』清水書院
【本文】「お雇い外国人」という用語は、使われていない。ただしお雇い外国人が果たした役割についての記述はある。【図版】新橋駅を描いた錦絵新橋・横浜間に鉄道が開通した。資金や技術はイギリスにたよっていた。【図版】富岡製糸工

場 群馬県富岡に政府がフランス人技師の指導でつくった模範工場の一つ。【資料】ベルツの日記を引用【本文】絵画や彫刻では、西洋の制作法が導入されるいっぽう、岡倉天心やアメリカ人のフェノロサが仏像などの古美術品を再評価した。
F. 『中学歴史教科書』学び舎
【本文】「お雇い外国人」という用語は使われていない。富岡製糸工場でフランス人技師の指導を受けていたことや鉄道建設にあたりイギリス人技師を招いたことを記述。【本文】ベルツの日記を引用【本文】アメリカ人のフェノロサや岡倉天心は、明治維新後かえりみられなくなっていた、伝統文化の芸術性を見直しました。
G. 『新しい歴史教科書』自由社
【本文】「お雇い外国人」という用語は使われていない。殖産興業に関して、「外国の機械を購入し、技術者を招いた」ことを記述。【本文】政府は1877年東京大学を創立し、9年後には初の帝国大学とした。外国人教師をやとい、講義は英語で行った。【本文】フェノロサは岡倉天心とともに東京美術学校の創設に尽力し、その保存と復興につとめた。
H. 『新しい日本の歴史』育鵬社
【歴史ズームイン】「外国人が見た日本」の中で、モースとベルツの日記を紹介【課題学習】「お雇い外国人」幕末から明治時代にかけて、日本に来た「お雇い外国人」の中から、興味を持った人物を取り上げ、調べてみよう。見本として、クラーク、ナウマン、パーマーの業績について紹介。参考資料「おまなお雇い外国人の業績一覧表」【本文】東京大学の外国人教師フェノロサは、岡倉天心らと日本の伝統芸術の保存と復興に努め、その価値を示しました。【人物クローズアップ】「フェノロサと救世観音」

### 3. 2. 取り上げられている「お雇い外国人」

次に教科書に取り上げられている人名を検討する。本文だけでなく図版等の中で紹介されている人物も含めた。

	フェノロサ	クラーク	ベルツ	その他
帝国	○	○	×	モース ナウマン ハーン コンドル
東書	○	×	×	なし
日文	○	×	×	なし
教出	○	○	×	モース コンドル ムルドル
清水	○	×	○	なし
学び舎	○	×	○	なし
自由社	○	×	×	なし
育鵬社	○	○	○	ナウマン、フルベッキ、ボアソナード、ロエスレル、キンドル、ワグネル、

(育鵬社 続き)				モレル、コンドル、 ヘボン、モース、ハー ン、フォンタネージ、 パーマー
-------------	--	--	--	---

### 3. 3. 教科書分析

まず広く用いられている「お雇い外国人」以外に、「外国人技術者」という表現も見られた。また「お雇い外国人」「外国人技術者」といった用語を使わず、外国人の技術指導に触れた社もあった。具体的な人物として全社に共通して取り上げられているのは、フェノロサのみであった。次に多いのが3社に取り上げられたクラークとベルツである。ベルツについては「日記」が引用されている。医学者としての業績(明治天皇侍医等)にも触れているのは育鵬社のみである。

「お雇い外国人」に関して最も多くの紙数を割いているのは、育鵬社の『新しい日本の歴史』である。課題学習の例として、「お雇い外国人」を取り上げているのも育鵬社のみである。「お雇い外国人」の定義を詳しく示した上で、クラーク、ナウマン、パーマーの3名の業績を紹介し、主なお雇い外国人の業績一覧表も資料として示した上で、課題学習を進めていくという手順はわかりやすく、中学生の発達段階に沿ったものであると感じる。またコラム「歴史ズームイン 外国人が見た日本」の中で、モースの旅行記、ベルツの日記についても紹介し、お雇い外国人が日本に対して深い観察眼を持っていたことも、わかりやすく紹介している。

次に記述が多いのが、帝国書院と教育出版である。帝国書院は見開き2ページの図版「日本と世界を結ぶさきがけとなった人々」の中で、モース、クラーク、フェノロサ、ラフカディオ＝ハーン(小泉八雲)、ナウマンを、業績を交えて紹介している。教育出版はオランダ人土木技師で、利根川と江戸川を結ぶ利根運河の建設や熊本・三角西港建設で知られているムルドルを取り上げているのが、特徴的である。

教科書分析から、取り上げられているお雇い外国人は少数で、活躍した分野も限られていることが明らかになった。民間通信社の記者として来日したラフカディオ＝ハーンや宣教師として来日したヘボンは、厳密には「お雇い外国人」とは言いにくい、日本滞在中の功績から教科書では「お雇い外国人」として扱われている。

## 4. 授業実践

### 4. 1. 「お雇い外国人入門」

(プリントを配布)

Q1.富国強兵を目指し、明治政府により招かれた外国人技術者を、何と呼んでいるか?

A1.「お雇い外国人」

Q2.①～⑥の人名とA～Fの業績を線で結ぼう。

①クラーク A 岡倉天心と協力して美術学校を創設した。

②フェノロサ B 地質学者で象の化石を発見。

③ヘボン C 札幌農学校の教頭「少年よ大志を抱け」

④ハーン D 進化論を伝えた生物学者。大森貝塚を発見。

⑤ナウマン E 日本の怪談話を採集して紹介。

⑥モース F 医者で目薬の作り方を教えた。

日本語のローマ字表記法を考案。

Q3.どこの国の人が多かったでしょうか。

A3.①英 269 ②仏 108 ③米 47 ④独 37

※1874年(明治7年)における統計。お雇い外国人がもっとも多かった年である。

Q4.給料はいくらぐらいもらっていたのだろうか?(月給)

※参考)日本の政治家の給料をあげる。

A4.キンドル(造幣首長) 1045円 クラーク(札幌農学校教頭) 600円 岩倉具視(右大臣) 600円

Q5.任期が終わっても日本に残った人はいたのだろうか

A5.ハーンやコンドルのように日本女性と結婚して、生涯を日本で終えた人もいた。

### 4. 2. 授業実践②

「日本の紙幣肖像の父」キョッソーネ」

紙幣図案制作を担当し、肖像画家としても知られるキョッソーネを教材化した授業を記す。キョッソーネはジェノバ出身のイタリア人。残念ながらフェノロサやクラーク、ハーンらに較べて知られていないが、以下の理由から取り上げてみた。

- ・明治政府が「富国強兵」「殖産興業」を目指す中で、財政の確立とそれに伴う紙幣発行は大きな意味を持つ。その紙幣を国産化する際に、キョッソーネが大きな役割を果たしていること。
- ・キョッソーネは知らなくても、彼の描いた西郷隆盛像は、生徒にもなじみがあること。
- ・紙幣肖像に興味を持つ生徒が多いこと。
- ・キョッソーネは紙幣肖像のみならず、地券や切手のデザインも手がけ、地租改正、郵便制度といった明治政府による新政策の学習とも連関していくことが可能であること。
- ・仕事ぶりが献身的であること。

授業実践「日本の紙幣肖像の父」キヨッソーネ	
<p>〈 〉 → 教師の問い 「 」 → 教師の説明 ・ → 生徒の発言</p>	<p>補足</p>
<p>○西郷隆盛と明治天皇の肖像画を提示。</p> <p>〈二人は誰だろう？〉</p> <p>「この二枚の肖像画は、写真ではなく、絵(コンテ画)です。そして二枚とも同じ人が描いています。この絵が描かれた明治の初め、富国強兵、殖産興業のかけ声が高まる中、日本で初めての本格的な肖像入りの一円札も発行されました。</p> <p>〈紙幣に描かれた人は誰だろう？〉</p> <p>・ 聖徳太子 ・ 明治天皇 ・ 福沢諭吉</p> <p>(神功皇后が描かれた明治14年製造の一円札を見せながら)</p> <p>〈この人なのだけど、いったい誰だろう？どこの国の人かな？〉</p> <p>・ デンマーク ・ イギリス ・ インド (人名は発言なし)</p> <p>「正解は神功皇后という人です。14代天皇仲哀天皇の皇后で、日本書紀によると、仲哀天皇の没後、その子応神天皇の摂政を紀元後200年から270年まで務めたとされます。しかし実在性には疑問が持たれています。実はこの肖像画を描いたのは、西郷や明治天皇を描いた人と同一人物です。紙幣の国産化のために、明治8年に政府が招いたキヨッソーネという技術者です。彼はお札や切手、地券のデザインも手がけ、『すかし』の技術も伝えました」</p> <p>〈キヨッソーネはどここの国の人だろう？〉</p> <p>・ アメリカ ・ イギリス</p> <p>「正解はイタリア人です。だから1円札の神功皇后像は西洋人ばいのです。紙幣肖像だけでなく、切手や地券、印紙などのデザインを手がけたキヨッソーネは、休日返上、盆休みもとらず働きました。イタリアに住む母が亡くなった時も仕事のため帰国せず、お葬式に参列しませんでした。大蔵省退職後も日本にとどまって、凸版印刷という会社をつくった弟子の指導に当たりました。1898年(明治33)に亡くなるまで、一度も故国に戻ることはありませんでした。彼のお墓は東京の青山墓地にあります」</p> <p>〈彼の遺言の中身は？どんな人に財産を分けるように書かれていたのだろうか？彼は生涯独身で、妻子はいません〉</p> <p>・ 親戚 ・ 友達</p> <p>「遺言状には、お金は親戚、友人、身の回りの世話をしてくれた人、町内の貧しい人に、弟子には製作道具を譲るように書かれ、日本で収集した15000点もの美術品は故郷のジェノバの美術館に寄付するように」と、書かれていました。</p>	<p>・ 西郷隆盛と明治天皇の写真を黒板に貼り付ける</p> <p>西郷についてはすぐに答えが出た。明治天皇はやや難しいが、知っている生徒もいた。</p> <p>・ 一円札を拡大して、黒板に貼った。ただし肖像(神功皇后)の部分は磁石で隠して、見えないようにした。(資料1)</p> <p>・ なぜ神功皇后が選ばれたのかについては、「征韓論」の学習時に説明する。</p> <p>・ キヨッソーネの写真を見せる。(資料2)</p> <p>・ 本物の地券を見せる。地租や地価などの数字に目が行きがちだが、細かいデザインが施されていることに注目させる。</p> <p>・ 凸版印刷が印刷した『学校の花子さん』を紹介。</p> <p>・ 筆者が青山墓地で撮影したキヨッソーネの墓の写真を見せる。</p> <p>・ 遺産の相続先については、授業時間がなくなり、教師側が一方的に説明してしまった。</p>



資料 1  
神功皇后が描かれていた改造一圓札  
(キヨッソーネ作)  
日本銀行貨幣博物館  
館転載許可済み



資料 2  
キヨッソーネ  
お札と切手の博物館 HP  
平成 28(2018)年度秋の特集展 [www.npbgo.jp](http://www.npbgo.jp) より。  
国立印刷局転載許可済



資料 3  
キヨッソーネの墓  
筆者撮影 (2017 年 8 月 5 日東京青山墓地にて)

## 5. 授業の感想の分析

「日本の紙幣肖像の父 キヨッソーネ」の授業の後に感想文を書いてもらった。

西郷隆盛や明治天皇の肖像画について、「写真だと思っていたのに、絵だったことを知りとても驚いた」という感想が多く見られた。導入の教材としてこの2つの肖像画を用いたことが、効果的であったことを裏付けることができた。

「現代の人たちが知らない人物にも、現代の私たちの生活の元を作った人がたくさんいることがわかった。お札や肖像画の歴史なんて考えたことがなかったので、新しい発見があってよかった。昔日本人は外国人にとっても助けられたんだとわかった」「キヨッソーネという人はすごい人だなと思った。自分のことより日本の発展に力を注いだキヨッソーネに感動した。でも少し申し訳ないような気持ち

にもなった。日本の発展のためにこんなにもたくさんの外国人が、人生をかけてくれたのだと思うと感謝して、日本も他の国の文化の発展に貢献していかないと感じました」という2人の感想は、お雇い外国人が日本の近代化に果たした役割を正確に理解しており、「先進国」となった日本がこれから担うべく役割も指摘している。歴史を単なる過去の出来事と捉えずに、「未来への指針」として学んでいると言える。

またキヨッソーネの行った日本の美術品収集について、「コレクションが15000点もあるのはすごいと思った。仕事ばかりで母国に帰れなかったけど、コレクションを母国の美術館に寄付することで、母国への思いが伝わったと思う」と述べたものや、「とても忙しいけど無我夢中で絵を描き、とてもやりがいのある生き方をしていたのだろうと思った。遺産を近所の貧しい人にあげるの親切だと思った」といった、働きぶりや遺産相続について感想を述べたものもあった。実際平日は朝6時から夜の10時まで勤務、日祝日も夏休みも返上という仕事ぶりであった。これについては「キヨッソーネという人は、はじめて聞いた名前だけど、とてもすごい人なんだなあと思いました。仕事は大変だけど、母の葬式にも行かない(大蔵省在職中に母が亡くなっている)というのは納得できない」という批判的な意見もあった。

また肖像画に描かれた神功皇后に着目し、「日本初の肖像画入りの神功皇后が、なぜ今知られていないのだろうかと思った」という疑問を持った生徒がいた。このことについては、「江華島事件」の授業時に、神功皇后が1円札の肖像に選ばれた背景を「征韓論」とからめて説明をした。

「凸版印刷は、私が持っているマンガや小説の印刷をしている会社だったので驚いた。キヨッソーネがいたから、お札がとてもきれいなものになったのかと思うとすごい」という感想を書いた女生徒もいた。授業の中でキヨッソーネが大蔵省退職後に弟子達が創立した凸版印刷で、技術指導にあたったことを紹介した。この生徒は家に帰り書棚を見ると、凸版印刷が印刷した本があったそうだ。授業中の話がこのような広がりを見せてくれるのは、授業者として嬉しいことである。

## 6. まとめ ～成果と課題～

今回の教科書分析及び授業実践を通して、以下の成果が得られた。

中学校社会科歴史的分野教科書における「お雇い外国人」記述については、具体的な人名は限られ、業績紹介に関しても分野が限られており不十分であることが明らかになった。その現状を改善するための具体的な授業として、①「お雇い外国人入門」 ②「日本の紙幣肖像の父キョッソーネ」を実施することができた。

①については、お雇い外国人についての用語理解から始まり、著名なお雇い外国人の業績を中心に、出身国や報酬なども織り交ぜながら紹介した。②で取り上げたキョッソーネは、現在使用されている中学校社会科歴史的分野教科書には取り上げられていないが、経済活動の元となる紙幣の国産化に大きく寄与した人物であり、また地券や、郵便制度発足直後の切手デザイン作成にも携わっており、日本の近代化に大きな功績を残したお雇い外国人の代表的な人物として認識すべきであることが、授業実践記録や生徒の感想から明らかにすることができた。

問題点としては、欧米出身の著名人に偏ったことがあげられる。具体的にはアジアからのお雇い外国人について、取り上げることができなかった<sup>3)</sup>。アジア出身のお雇い外国人として、水夫や火夫として灯台の維持管理にあたったフィリピン人、製茶の仕事や開拓使で農業に従事した中国人などがいる。華々しい活躍をしたスター的なお雇い外国人ばかりでなく、縁の下での力持ち的な人々にも光を当てる必要があったと反省している。今後授業の改善を試みたい。

### 注

- 1) 分析対象としたのは、以下の教科書である。  
いずれも平成 27 年度検定。  
『新しい社会 歴史』 東京書籍  
『社会科 中学生の歴史』 帝国書院  
『中学社会歴史的分野』 日本文教出版社  
『中学社会歴史 未来を開く』 教育出版  
『中学歴史 日本の歴史と世界』 清水書院  
『新しい歴史教科書』 自由社  
『新しい日本の歴史』 育鵬社  
『中学歴史教科書』 学び舎

- 2) アンケートと授業は、どちらも筆者が勤務していた奈良県 H 中学校にて、2018 年 1～2 月にかけて行った。
- 3) 1890 年までの国別お雇い外国人総数順位を見ると、欧米諸国以外で一番多いのは中国（全体では 4 位）で 250 人、二番目がフィリピンで 79 人であった（全体では 7 位）。中国人は 77.7%が民間雇用だが、開拓使に雇用された者もいる。1875 年（明治 8 年）12 月に開拓使東京出張所に集められ、エドウィン・ダンらの指導を受け、北海道農業に関する実習を行い、彼らが栽培した大麦が札幌に送られて、国産第一号のビールの原料になった。三年間の期限付きで、月給は約 5 円とかなりの高給で（学校の教師と同水準）あったが、入植予定地が札幌農学校の附属農園になってしまい、指示された丘珠地区で新たな開墾を余儀なくされた。許士泰の農場は、北海道が干ばつに見舞われたときも穀物が実り、丘珠につくられた天皇家の御料地の運営を任せられた。明治八年一二月には開拓使に鞆皮工として、張尚有と王直金が雇用され、函館で勤務している。フィリピン人のほとんどは工部省の灯台寮に水夫、火夫として雇用され、灯台を巡回する船舶（テーボール丸や明治丸など）に乗船した。

### 参考文献

- 植村 峻(2015), 紙幣肖像の近現代史, 吉川弘文館  
梅溪 昇(1965), お雇い外国人, 日経新書  
明治美術学会印刷局朝陽会(1999), お雇い外国人キョッソーネ研究, 中央公論美術出版  
リア・ベレッタ(2003), キョッソーネ再発見, 印刷朝陽会  
武内 博(1995), 来日西洋人名辞典, 日外アソシエーツ  
原田一典(1975), お雇い外国人 13 開拓, 鹿島出版会  
田中和夫 広報さっぽろ 2005 年 3 月号東区版, 続・東区物語 丘珠村開拓に賭けた清国農民達の栄光と挫折  
植村正治(2008), 明治前期お雇い外国人の給与, 流通科学大学論集-流通・経営編-第 21 巻第 1 号函館市史デジタル版 p1027~1029  
<http://www.city.hakodate.hokkaido> 2019 年 11 月 28 日閲覧  
札幌市教育委員会, インターネット版さっぽろ文庫 19 巻お雇い外国人  
<https://www.city.sapporo.jp/kobunshokan/kankobutsu/bunko/index.html> 2019 年 11 月 28 日閲覧